

## 研究所だより

細越 雄二

天気予報では1か月先までは気温の高い日、いわゆる残暑はまだ続くようです。しかし、日は確実に短くなっており、夕刻になるとセミの鳴き声に交じって虫の鳴き声を聞くようになりました。秋の訪れを感じます。

秋といえば、過ごしやすい気候になることから、食欲の秋など「〇〇の秋」といろいろな言葉が秋の前に付けられます。私は「読書の秋」にしようといつも思って手元には読みたい本をストックしているのですが、なかなか読み進めることができず、どんどん「積ん読」になってしまいます。もう読むことはないと判断した本を思い切って処分しても次から次へと増えていきます。

最近、IT技術が進歩して電子端末で本を読むことができるようになり、それも紙の本よりも安価な本(の電子情報)が登場しています。私は電子端末を持っていませんが、見聞きするところでは、確かに、電子端末だと厚手の本でもかさばらないため持ち運びには便利です。また、記録容量にもよりますが、相当な本の情報を記録できるため、たいていの場合は本棚が不要になります。さらに紙質が劣化することもないし、検索することも容易になったり、弱視の方のために本を読み上げて、音声で聴く

ことができる機能があったりと、紙の本を読む場合に比べて多くの長所があるようです。なお、音楽の世界ではCDを買うよりもダウンロードして、電子端末で聴くのが当たり前になっています。

でも、端末の場合は、そもそも端末に電子情報として記録しておかなければならず、また、同時に何冊の本を見開くのには不便だし、ちょっと見るくらいなら端末を立ち上げる方がかえって時間がかかるなど短所もあると思います。その他にも違法コピーなど著作権侵害の問題も考えられ、そのための対策も必要です。

あまり短所ばかりを強調すると、端末利用者からは、時代についていけない、端末を使いこなす自信がないのだとか、まだ紙の本に愛着を感じているからだと言われそうです。技術進歩による便利さを追求するのは世の流れなのかもしれませんが、本の電子化に限らず、便利さや快適さを得ることと引き換えに、これまで大切にしてきたものを失うことにならないか、直接は失っていないけれども負担を誰かに転嫁してはいないかということについて、一歩立ち止まって考えることが必要なのではないかと思っています。